

揺れる台湾史

柳本通彦

台北観光の定番コースが様変わりした。故宮・忠烈祠・龍山寺に続いて中正紀念堂というパターンだったのが、このところ、最後のスポットは101ビル（現在世界第二の高層）に置き換わっているのである。

中正紀念堂の「中正」とは蒋介石のこと。すなわち、もともと、ここは蒋介石元總統の功績を称えた記念館で、巨大な坐像が正面に鎮座しており、その衛兵の交代式が日本人観光客の人気を集めていたのだ。

蒋介石が亡くなったのは1975年。それから5年の歳月をかけて現在の紀念堂と広場が建設された。7万5000坪以上に達する広大なもので、その中心に建つ本堂そのものは北京の天壇を模して設計されたという。その紀念堂の看板が昨年末、「台湾

民主紀念館」と「自由広場」に取り替えられ、衛兵も従来の展示も「撤去」された。事実上、中正紀念堂の歴史に終止符が打たれたといえる。桃園空港・台湾郵政など、次々に呼称の「台湾化」を進める陳水扁總統の政策の一環だが、今回の場合は、かつての独裁者の威光を消し去りたいというきわめて政治的思惑があった。

それというのも、台湾の民衆の中で、蒋介石・蔣経国両總統に対する憧憬が、歴代總統の貢献度を問う市民の意識調査によると、台湾にもつとも貢献があつたと思う總統は誰か？ という質問に対して、第一位は蔣経国で50%、第二位は李登輝の11%、ついで蒋介石の6%、最後に陳水扁の5%という回答が得られたという。なんと陳水扁現



中正紀念堂の広場は「自由広場」に改称された

か獲得できなかった。まさに惨敗としかいえない。これが人材不足を露呈した民進党施政8年間に對する有権者の厳しい評価だった。

選挙期間中、民進党は、国民党時代の悪政を並べ立て、民主化の成果を誇示した。しかし市民は、「民主化」にも「台湾化」にも飽いていた。清廉かつ堅実な経済政策をこそ望んでいたのである。

これで中国国民党馬英九候補の支持率が6割に達し、俄然優位に立ったといわれる。馬英九候補は、中正紀念堂の名称を従来に復帰させると公言している。玄関口たる空港の呼称だって変わる可能性がある。重要スポットの名前が、ときどきの政治家の思惑で簡単に変更される混乱振りに、基層公務員はそのたびに翻弄され、市民は冷たい視線を送っている。

ちなみに、台北市内のバス停も地下鉄も、現在は存在しない「中正紀念堂」の駅名のまま不変である。

そして總統選の前哨戦と位置づけられた1月の立法院選挙。与党民進党は、小選挙区制度ならではの地滑りの敗北を記し、全113議席のうち27議席し

低い評価なのである。3月に總統の改選を控える民進党としては、なんと蔣父子のイメージを貶めて、台湾人意識を高めてもらいたいと、中正紀念堂の廃止を強行したのだが、それに対して、前掲調査でも6割の市民が反対の気持ちを表明したという。

やなぎもと・みちひこ
京都生まれ。99年度「潮賢」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」（現代書館）「台湾革命」（集英社新書）「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く、台湾原住民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）